

Book Review

全部床義歯臨床のビブリオグラフィー 時代を映した材料・手技・コンセプトに見る 教育・臨床の変遷

松田謙一 著 前田芳信 監修

● ● ●

Reviewer

市川哲雄 Tetsuo Ichikawa

(徳島大学大学院医歯薬学研究部口腔顎顔面補綴学分野)

A4判, 272頁
オールカラー
定価(本体 16,000円+税)
医歯薬出版刊



評者が若いときに肉眼解剖学を元にした全部床義歯の本を書いたら、渡邊誠先生に「完成された全部床義歯にこんな切り口があったのか」とお褒め(?)の書評をいただいた。自分が年を重ね、本書の元になった月刊『歯科技工』の連載(全部床義歯臨床のビブリオグラフィー——成書の改訂各版記述の比較にみる、無歯顎補綴治療の本質と臨床知見70余年の蓄積、全25回)を目にしたときに、まさにこんな切り口があったのかと松田謙一先生の慧眼に舌を巻き、その才に脱帽したことを思い出す。そして掲載号を楽しみにしていたものがこのように一冊の本となると、改めてそのことを感じる次第である。

若者に向ける言葉の一つに「川を上れ、海を渡れ」というものがある。川を上れというのは「過去を学べ」であり、海を渡れとは「海外の事象を学べ」ということであろう。まさしくアメリカの、いや世界の全部床義歯学のバイブルといえる『Prosthetic Treat-

ment for Edentulous Patients』(PTEP。邦訳名:バウチャー無歯顎患者の補綴治療)の第1版から第13版までを俯瞰、整理し、あわせて日本の教科書やみずからの臨床とともに批判的吟味をした本書こそは、まさに「川を上って、海を渡った」松田先生の力作であろう。

PTEPは非常によい本ではあるが、既刊の和訳書は翻訳であるため読みづらいところもあり、原著第10版以降の筆頭編者であるザーブ先生の英語も非常に高尚で意味がとりにくい。したがって、本書はそれをわかりやすく解説しているとともに、全部床義歯の治療法の変遷をたどる歴史物を読むという楽しみも有している。しかしそれは著者の意図するところでは全くない。

多くの歯科医師は、どの術式が、どの材料がよいというHow toを求めがちである。しかしながらその治療術式の本質を、どうしてそうするのか、なぜそうなるのかを考え、理解しないとさまざまな症例に対応できないし、術式のエラーにも気がつかない。そのよ

うな洞察力を身につけることこそが真に重要であり、それには過去から学ぶことが一番である。「患者は経験から学び、賢者は歴史に学ぶ」という言葉があるが、賢者の皆さんは本書を手に取り、無歯顎補綴に必要な洞察力を自然と身につけられるものと期待する。監修者の前田芳信先生は、常に教員に対し、治療結果以上にどうしてそうしたのか、なぜそうしたのかという「Why」を問い続けられたそう。松田先生のこのような力作ができあがった背景は、そのような物事の本質を突き詰める前田先生の薫陶の賜物ではないかと思う。

私事であるが、PTEPの第7版、第9版を監訳し、原著第5版~第7版の筆頭編者であったバウチャーに直接師事した松本直之は評者の師であり、その原著を元にした松田先生の著書の書評をこのように書かせていただくのは、何かの縁を感じるとともに至極光栄なことである。